

**<寄稿要項>坂口安吾『桜の森の満開の下』(読書・映画・音楽)**

著者	村岡 雪枝
雑誌名	日本文学誌要
巻	54
ページ	121-121
発行年	1996-07-13
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/00019914">http://hdl.handle.net/10114/00019914</a>

坂口安吾

## 『桜の森の満開の下』

村岡 雪枝

「桜」という言葉は、それ自体魅惑的であると思う。「桜」の樹に対して、日本人は何か特別な感覚を受けずにはいられないらしい。

「この爛漫と咲き乱れてゐる桜の樹の下へ、一つ一つ屍体が埋まってゐる」と言ったのは梶井基次郎であるが、安吾は「桜の花の下は怖い」と言う。「桜」の森林の美しさは、人を不安にさせるようだ。美しい女が男を狂わせたように。

この小説のクライマックスは、男が愛する女を、桜の森の満開の下で殺害してしまうというものであるが、この場面を読むと、とても切ない気分になる。男は背負っていた女が鬼女であると思ってしまうのだが、何故そんな幻覚を見てしまったのだろうか。桜の樹の

美しさは、断片がたくさん集まってつくられたものだ。女の美しさもまた、狂気や恐怖や不安などの集合体であつたのであろう。男が女の美の裏に感じていた不安は、桜の森の満開の下でピークになる。男はその不安から解放されたかつたのだ。しかし男はやはり、女を愛していた。女を殺してしまつた後も愛していた。男は孤独になり、初めて人間らしいはつきりとした感情——悲しみを知ることができるのである。

満開の「桜」の森の下にあるのは「孤独」であらう。ザワめく花の集合体の下だからこそ、人は「孤独」を感じる。しかしこの「孤独」は、愛しいとか悲しいという、最も人間の根本となる感情を生み出す。集団から切り離された場所に、人間の人間らしい生がある。人は独りだからこそ、人を愛し、求め、狂い、不安になり、切り離す。こんな事を続けていくのだろうか。

『桜の森の満開の下』を読んだ後、私は桜を見ると、とても冷めたく切ないイメージを受けるようになった。読む度に胸がしめつけられるような痛みを感じる小説だけれども、やはり私はこの小説が好きだ。

(4年G組)

る革命」とが両立する道はないかという疑問を負っているとみたところが面白いと思ひました。特に、西行が崇徳院に反論する際に用いた、単なるエピソードとして見過してしまひそうな、仁徳天皇と菟道稚郎子にまつわる逸話に着目したことに関心を持ちました。菟道稚郎子が日本で初めて儒教を学んだ人物であるという歴史的背景を挙げ、秋成がこの儒教の観念についても疑問を投げかけているとしています。

この論文は、秋成は「道」「徳」などの概念にとらわれずに、人間の生き方の切実な問題として矛盾を止揚する道を探っていると結んでいます。また、秋成がなぜ人間のあるべき姿を問わざるを得ないかについては、貨幣経済の導入により、それまでの人間像が根底から覆されたからとしています。そう述べるのはいささか性急であるように感じられますが、秋成が巻九の「貧福論」で扱ったテーマを考えてみると、納得ができるのです。

この論文を読んで、作品を読むにあたっては、その時代背景や細かなエピソードも深く掘り下げて考察すべきであるということがわかりました。

(3年G組)